

# 《湯島聖堂積奠図》について

横島 菜穂子

一、積奠について

二、「積奠図」一覧 翠川文子氏の研究紹介を兼ねて

三、「積奠図」補足

四、「積奠図」の特徴

五、《湯島聖堂積奠図》

一、積奠について

積奠は、「孔子をはじめとする儒教の先哲を先聖・先師として祭る祭儀」(1)である。古代中国に始まり、東アジアの儒教圏に広まった。祭る対象は中国でも諸説変遷があり、盛唐以降、先聖・先師には、孔子と顔回とをあてたが、明代以降は先聖・先師併せて孔子の尊称となった(2)。日本における積奠は、大宝元年(七〇一)まで遡れる。先聖・先師には孔子と顔回をあてることで一定し、儀式の名称は「せきてん」のほか、「しやくてん」「おきまつり」「孔子祭」などとも言われる。

近代以前の日本の積奠は、前期、後期と大きく二つに分けられる。前期積奠は、律令の定める積奠をさし、中央の大学寮と、短期間ではあったが地方の国学でおこなわれた。大学寮における積奠は、宮中の年中行事のひとつに組み込まれ、上卿、参議、大学寮関係者が列席した。儀式の次第は『延喜式』をはじめ、『西宮記』、『江家次第』など多くの古記録類によって確認できる。基本的な構成は、先聖先師へ供え物をして祀る饋享と拝廟、儒教古典に関する質疑をする論義、そして酒宴である百度座、宴座、穩座から成り、穩座では文人により漢詩が披露された。この儀式は二月、八月に行われ、治承元年(一一七七)年に大学寮が焼失したあとは、場所を太政官庁に移して継続されて一五世紀まで続いた。

戦乱を経て積奠が復活するのは、江戸時代初期である。その間にも、三条西家隆による積奠詩会の催しが開かれたり(3)、一部の藩校や孔子廟では私的な積奠が行われた。元禄四年(一六九二)に、江戸幕府の支援により、落成したばかりの湯島聖堂大成殿で行われた最初の積奠は、五代将軍徳川家綱と大名が参列するという盛儀となり、幕府の公的行事という性格を帯びた。以後、積奠は全国の藩校や教育機関に広がりを見せた。江戸幕府の文治政策

を背景としたこれらの後期積奠は、多くが個々の機関の私的な行事として続いたが、江戸幕府が倒れると共に終焉を迎えた。なお、明治以降に復興した積奠も多く、現在も湯島聖堂をはじめ、各地の孔子廟で行われている。

いわゆる「積奠図」は、このうち前期積奠、つまり宮廷の年中行事として大学寮で行われた積奠を描いた一種の記録画であるが、絵の内容と識語から、近世に入ってから古記録類を参考にして制作された新しい図と考えられている。この点で、『年中行事絵巻』とは区別される。黒川真頼の編んだ『考古画譜』によると、「積奠図」には二種類あり(4)、ひとつは江戸中期の有職故実の学者である紀宗直(一七〇三—一八五)の奥書を持つ狩野永納の写本、ひとつは松岡宗翹の伝える伊賀本という。しかしこの伊賀本に相当する絵はまだ確認されていない。もともと記録画という性質上、画家の個性は反映されにくく、面風から制作年代や制作者を特定することは難しい。さらに現存するのはほとんど写本や下絵の類であるため、従来美術史の研究対象にはなりにくかった。

湯島聖堂に伝わる『湯島聖堂積奠図』(挿図1—6)(5)も、こうした「積奠図」のひとつである。今回の「美術史料による江戸初期湯島聖堂の研究」は元禄三年、湯島聖堂落成当時の大成殿内部を復元しようとする試みである。対象としているのは平時の大成殿の「礼拝空間」だが、積奠は大成殿で行われる最も重要な儀式であり、本来大成殿の意義はこの儀式にあると考えられるため、補足的に調査することになった。

本稿では、まず現存する「積奠図」の種類と性質を確認し、その上でこの「積奠図」(以後湯島聖堂本と呼ぶ)の特色について言及したい。「積奠図」については、すでに翠川文子氏が有職故実の立場から悉皆調査を行い、論文を発表されている。本稿は基本的にこの研究に依拠し、美術史の見地から補

足する。

## 二、「積奠図」 翠川文子氏の研究紹介を兼ねて

「積奠図」は基本的に一場面を一図として描いた紙本の卷子形式で伝わっている。例外は掛幅の湯島聖堂本一本にすぎない。絵は彩色を丁寧にしたものから、墨で輪郭だけ取ったものまで様々である。翠川文子氏の調査(6)では、「積奠図」一三本(7)を、主に場面構成を手掛りにして大きくABCの三系統に分類している(以後、この系統名を翠川氏にならないABCとアルファベット表記する)。内訳はAが七本、B三本、C三本である。

Aは、次の一〇場面から成る。

一 廟門座 上脚・参議の待機する場所のことで、もともと大学寮の聖堂を囲む扉に設けられた南門のことだった。

二 帷座 参列の人を入れる小屋。四方の柱に幕を掛ける。

三 拝廟(堂下) 太政官庁の正庁または朝庁を廟堂とし、掛けられた孔子・十哲の画像に拝礼する。堂に入る前に上脚から手を清める。

四 拝廟(堂上) 堂にあがり孔子の像に一同再拝し、次に顔子の像に再拝する。

五 應堂饗(寮饗) 大学寮の正庁にて上卿以下に酒食を供す。

六 都堂(講論) 都堂にて経書の論議。

七 百度座 都堂にて酒と饗を賜わる。

八 宴座 都堂にて大学寮の三道堅義(明経道・明法道・算道の学生が論議すること)。

九 (宴座) 詩会 都堂にて公卿・文人・大学寮関係者の詩作。

十 穩座 都堂にて詩の朗読。

次にBは、一、廂門座・幄座、二、拜廟、三、都堂(講論)、四、百度座、五、宴座の五図、Cは室内図と堂上・廟庭図(饋享)(ききょう)(先聖先師に供物を捧げる儀式)の二部構成である。湯島聖堂本もここに入る。AとBでは同じ場面でも、明らかに図様が違うので、「異本」ではなく、別系統である(Aの挿図8、9・Bの挿図11参照)。

翠川氏は、古代中世の故実書や日記と絵を詳細に照合させ、有職故実の観点から素性を次のように結論付ける。A、B、Cはいずれも大学寮で行われた積奠を描いたものである。Aは比較的『江家次第』に近い。しかしAもBも参列者の配列や数などにおいて、現存する儀式書と食い違いが各図に散見されるので、参考にした儀式書を特定することはできない。AとBの構成の違いは、依拠した儀式書の違いと考えられる。またCはAとBにない場面を描いているが、大学寮の知識が見られず、『延喜式』に基づいた想定図(8)と見なすことが出来る。

三系統の「積奠図」のうち、来歴が比較的詳細にたどれるのはAのみである。Aは識語から、京都の有職故実家で代々宮中の御厨子所預を務めた高橋家周辺より出た図であることが分かり、さらに二系統、高橋宗直(一七〇三―一八五)所持本の写しと伊藤東涯(一六七〇―一七三六)所持本の写しに分けられる(9)(10)。高橋宗直の祖父は、有職故実研究の第一人者であり、野宮定基らと『類聚雜要抄』を作成したことで知られる高橋宗恒(一六四〇―一七〇六)である。宗直もまた、伊藤東涯に学び、有職故実の学者として大成し、享保二年には旧儀の調査検討に努力した。

翠川氏の推測では、AとBは高橋宗恒を遡る識語がないので、この二系統は、応仁の戦など戦国時代に一度は廃れてしまった積奠に、再び関心がもたれはじめた江戸前期、御厨子所宗恒本人によって試作された図である可能性が高い。Cも古図とあるが、絵の内容から判断すると、前期積奠の知識が失われ、かつその積奠に興味をもたれた時代に制作された可能性が高く、やはり江戸前期と見なせるという。この場合の江戸前期とは、文脈から宗恒の活躍した一七世紀中期から一八世紀初期と解せるだろう。

さらにAの来歴に関わる重要な資料として同じ論文中に『積奠供物図』が紹介されている(11)。名前の通り、積奠に用いる供物だけを図示した絵(12)である。高橋宗直の識語によると、弘安一〇年(一二八七)の「積奠図」を当時の御厨子所預だった高橋宗長が制作したが、長い年月の間に破損したものを、子孫である宗恒が天和三年(一六八三)に考証して補ったという。そしてこの図とAの「積奠図」に見られる供物は、種類や器の人数において一致する。この資料によって、Aの原本は、『供物図』と同様に、高橋宗恒が複数の古記録に基づいて制作し、孫の宗直の代に流布したという蓋然性がより高いものとなった。

なお、「供物図」という名称をもつが、実際には積奠の次第を描いた「積奠図」もある。例えば『古事類苑』に一部引用されている『弘安十年積奠供物図』(13)は、Bの「積奠図」の系統にあてはまり、次章で紹介する土佐派の『積奠図絵巻』はこれを参考にして描いたとされる(14)。

### 三、「積奠図」補足

翠川氏の論文執筆後、この一〇年あまりの間に新たに整理され、「積奠図」

として図録や論文に掲載されたものがいくつかある。所蔵先によって文書扱いにするか絵画史料と見るかはまちまちであるうえ、重要視されずに目録に漏れている史料もあることから、今後、調査によって確認できる数はさらに増える予想される。

新たな「釈奠図」は次の五例で(15)、いずれも翠川氏の分類に当てはまる典型的な作例だった。所蔵先と名称、系統をあわせて記す。なお脱稿後、徳川美術館で調査させていただき、翠川氏の紹介した図に加えて新たに二本の「釈奠図」を見ることができた。詳細については稿を改めるが、儒学を重んじた尾張徳川家のコレクションで、重要な史料とみられるため、部分的に触れることにする。

- ① 足利学校 《釈奠之図》 A B (16)
- ② 国会図書館 《釈奠図》 A B (挿図7-10)
- ③ 玉川大学教育博物館 《延喜天曆間釈奠図》 A B (17)
- ④ 京都産業大学図書館 《釈奠図》 B (18) (挿図13)
- ⑤ 京都市立芸術大学芸術資料館所蔵土佐派絵画粉本《釈奠図絵巻》 B (19)

①から③はAとBが続けて継がれた卷子形式の「釈奠図」である。A Bを別個に扱うこともできるが、ここでは流布の一形態であることを重んじ、あわせて一本と数えることにする。①の足利学校所蔵の《釈奠図》は、彩色鮮やかな一巻本である。稚拙ではあるが謹直に輪郭をとり、供え物や聖像の掛幅の衣装の色に至るまで、丁寧に色を施している。供物の机には、逆遠近法を用いる。図版に全図が掲載されているが、これによると、Aの冒頭には「廟門座」がなく、次の「幄座」から始まっているため九場面、Bが五場面の、

合わせて一四場面である。

①は、稚拙ながら丁寧な描線をもち、伝来の正しさから基本作例のひとつと思われるので、Aの部分の全般の解説を兼ねて少し詳しく述べたい。ここには朱書と墨書の二種の書き込みが認められ、このうち朱書の書き込みは異本との校合、墨書は有職故実に関わる記載に限られる。例を挙げると朱書は「此所異本図別此写之」「異本輓皆同」など、墨書は、図中の供物に対して付けた「此案図者永納図之出処可考改之牲左右兩足誤也見式可改之」(20)などである。さらにAの巻末には、やはり墨で「異本ノ付紙ノ分ハ以類本校合之時處々付之事」「享保十四年十一月二十五日紀宗直」の奥書があり、宗直が享保一四年(一七二九)に校合したことが分かるのである。この書き込みでとくに重要なのは、宗直がこの図を「永納図」と呼ぶことだろう。「永納図」とは原本の制作者が狩野永納であることを意味すると思われる、足利学校本の図版の解説にも、第一章の冒頭で引用した『考古画譜』が引かれている。つまり、Aの釈奠図を実際に描いたのは、翠川氏の指摘する高橋宗恒ではなく、京都で活躍した絵師・狩野永納と想定されるのである。これは次章で扱いたい。

国会図書館には、翠川氏の紹介した住吉具慶筆とされる《釈奠図》(挿図11、12)のほかに、もう一本の《釈奠図》が所蔵されている。これが②である。一巻仕立てで、冒頭には天明戊甲(一七八八)一〇月に「源保繁」が写した「春秋之古図」があり、続けてAとBの合計一五場面が連続し、最後に天明戊甲(一七八八)八月に日下部宿禰勝舉による識語がある。Aには錯簡が見られ、一廟門座、二幄座、三拝廟(堂下)、四拝廟(堂上)のあと、本来最後に来る八宴座、九詩会、十穩座と奥書が先に来て、五廳堂饗、六都堂講論、七百度座と続いている。やはりAには「永納本云々」の書入れも写されている。

る。

全体に描線や彩色に稚拙なところがあるが、徳川美術館に存在する同系統の《積奠図》の忠実な写本である。写す過程で変更されやすい庭の松や梅の花なども、おむねそのまま描き取っている。識語には、「積奠図」の写本には正確に臨模したものがないので、新たに写して足利学校に寄贈したとの経緯が書かれている。しかしながら徳川美術館所蔵の《積奠図》には、「春秋之古図」と「識語」はない。国会図書館所蔵の《積奠図》と絵と識語がもともと同じだったのかどうか、さらにこの識語と足利学校本の関係も、後日改めて調査する必要がある。

③の《延喜天曆間積奠図》はA、Bの一五場面である。題名の「延喜天曆」とは、「延喜式」を想定した名称だろうか。国学者である狩谷郷雲の所蔵だったという。

④の京都産業大学図書館所蔵の《積奠図》はAで、図版には「著廟門座」と「拝廟」及び「宴座」の二図が『あふひ』の口絵に掲載されている。解説によると、巻末に「貞享丙寅二年（一六八五）九月下旬」（挿図13）と記されており、確認できるBのもつとも古い作例といえる。

最後の⑤《積奠絵巻》は土佐家に伝わる無彩色の下絵（21）で輪郭だけをとったものである。土佐家は言うまでもなく中世以来、絵所預として代々官廷に仕えた、伝統的なやまと絵系絵師の一派である。戦国時代には狩野派などに押されて堺に移ったが、寛永年間に土佐光則、光起親子が上京し、家の再興を願い出た。土佐絵所の開設が許されたのは光則の死後、承応三年（一六五四）で、以後、京都を中心に活躍した。

図版で確認した《積奠絵巻》は、無彩色の下絵である。段落式に「著廟門座」、「拝廟」、「内論議」、「百度座」、「宴座」の五場面（22）が配列されて

いる。紙背の絵が透けて、松の木などが表裏のどちらに属するか判別しにくい。図版はまさにBの五場面にあたり、流麗な線描による「積奠図」である。松尾氏によると、画風や他の下絵資料との比較から、制作時期は「十七世紀末から十八世紀のごく初期」（23）と推定され、この時期に活動していたのは土佐光成および光祐であるが、《積奠絵巻》は、光祐の手による《四季遊宴図》の冒頭部分と作風が似るといえる。下絵の背面にはやはり年中行事のひとつだった「尚齒会」の様子が同じ手によって描かれている。補紙の使用法から、先に描いた「尚齒会」を反故にして、表に「積奠図」が描かれたことが分かる。松尾氏は、二つの儀式が紙の表裏に描かれている点を重視し、下絵の制作には、故実研究が盛り上がりを迎えるこの時代の気運と関係があったと指摘する。

#### 四、「積奠図」の特徴

翠川氏の紹介した一三本と、新しい「積奠図」五本（24）に基づき、Aの二系統の来歴について問題を整理してみたい。

はじめに注目されるのは、流布の形態として、AとBが合わせて一巻として伝わる作例が多いことである。翠川氏の調査した「積奠図」のなかにも穂久運文庫の一例があるが、そのほか国会図書館、足利学校、玉川大学図書館にもこの形態の作例が確認された。さらに徳川美術館所蔵の一本は明らかに国会図書館所蔵の原本であり、国会図書館本の識語は足利学校本との関連を示す。なおAとBが合わせて一巻になった経緯は、徳川美術館所蔵の附属文書にある「元本二巻也。今為一卷家藏ス」という一文によって説明されると思われるが、本稿では示唆にとどめたい。

この形態の「積奠図」が確認されたことによって重要な知見が得られた。それはこのタイプではBだけに書き込みが見られないことである。もしABとも、宗恒周辺で制作され、宗直が所蔵していた本ならば、同じように勘記や原本に関する識語が入るはずだが、実際にはBには場面の名称や役職注があるだけで、宗直の奥書もない。ここから二系統の伝来は、別個に考える必要がある。

そこでまずAから整理する。前章で述べたように、Aは高橋家伝来のものであり、「永納図」を享保一四年（一七二九）に高橋宗直が校合したものと考えるのが妥当だろう。京都で活躍した狩野永納（一六三一—一九七）は、林家の《歴聖大儒像》を制作した狩野山雪の長子にあたり、徳川光圀の『大日本史』編纂に作図などで協力している。永納は高橋宗恒が「積奠図」制作を依頼するのに年代的にも資質から見てもふさわしい人物だった。

参考までに翠川氏の調査したA四本には年記があり、順に明和元年（一七六四）、宝暦甲申年（一七六四）、明和三年（一七六六）、天保七年（一八三六）で、伝本に偏りがあるにせよ、写本作業の大半が一八世紀後半の数年間に集中している。一七世紀中期から一八世紀初期までが「積奠図」への関心の高まったひとつの時代とすれば、写本作業の集中は、それからおよそ一世紀後、再び「積奠図」への興味が再燃したと考えることもできるだろう。

次にBは、京都産業大学と京都市立芸術大学芸術資料館の《積奠図》によって新たな手掛かりを得られた。制作年代は、前述したように、京都産業大学の奥書によって貞享二年（一六八五）以前まで遡れるようになった。原本の制作者については、国会図書館所蔵のBの題箋に「積奠図 住吉具慶」とあることが、従来唯一の情報だった。住吉具慶は土佐派の分派である住吉派の二代目にあたり、剃髪して具慶と名を改めたのは元禄四年である。題箋が

正しいならば、この《積奠図》の制作は、具慶が出家した最晩年の一六九一—一七〇五に絞れるが、画風はそれに反して写本らしい形跡をとどめる。たしかに薄紙に、細い線で屋根瓦の文様まで細かく描いており、彩色は美しく、濃淡をつけるなど洗練された手法が見られるが、場面転換に用いられた庭の松樹の描写は粗く、肝心な積奠次第と二次的な背景とでは、描き方が揃いなのである。また絵の中には具慶の印は認められない。具慶は京都に生れ、天和年間（一六八一—一八三）に江戸に移り住み、貞享二年以降は將軍綱吉に仕えた。住吉派は代々宮廷絵所預をつとめた土佐派の分派で、父の如慶は年中行事絵巻を天地まで原図通り写している。国会図書館所蔵の絵は、住吉派風であるが、具慶本人の手とまでは推定できないだろう。具慶の家柄と、積奠復興時に活躍した世代であることから、後世に仮託された可能性が高い。

その一方、京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の《積奠図絵巻》によって、Bの「積奠図」が土佐派の粉本として伝わった図様であることが確認された。さらに松尾氏は、土佐派にはこの「積奠図」とは別に、「積奠図」を粉本として所持していたことを指摘している。作品は現存しないが、光芳（一七〇〇—一七二）が享保一〇年（一七二五）に作成した絵巻粉本目録には「積奠 同段（百年余）」と記載されているのである（25）。光芳の年代鑑定には時に一世紀近くの誤差があるというが、少なくとも一七世紀後半の積奠復興への気運が高まった時代に、すでに「積奠図」が土佐派のレパートリーに加わっていたと可能性は高い。住吉派は土佐派の分派であることから、国会図書館所蔵のBも、この目録にある絵巻の遠い写本であるかもしれない。

最後にAとBとの来歴が違うことを証明するのに、もうひとつ手掛かりになるのは、異本の有無である。Aは前述したように、異本の存在が確認できた。異本では、参列者の人数や配列方法など、どちらかという式の細かい

内容に違いが見られるが、これは有職故実家ならではの試行錯誤の表れとみられる。こうして生まれた二通りの「積奠図」は、片方が東涯に、片方が宗直に伝わったと解釈すると分かりやすいのである。それに対してBはいずれも五場面で、図様は安定している。この理由は、土佐派の粉本として伝わったことに求めるのが自然であるだろう。土佐派に限らず、近世の絵師の家では、粉本は正確に踏襲されていた。粉本を用いて新たな画面を構成することはあるが、Aのように有職故実に関して異本を作ることはない。

現時点で分かることは、Bの成立事情ではなく、Bの流布の形が二通りあったことである。《積奠絵巻》の優雅な線描からうかがえるように、土佐派の粉本は、どちらかといえば鑑賞を前提にした絵巻として扱われた形跡がある。しかし、高橋家に伝わったBは、Aと合わせて一卷とされ、有職故実への関心から写されていた。この伝本の経緯の違いにより、同じBでも、単独で伝わる国会図書館所蔵本や土佐派粉本の王朝儀礼にふさわしい典雅さをたたえた絵巻と、有職故実に重きを置く図式的な写本とが生れたのである。

以上のように「積奠図」には未だ説明されない点が多い。AとBの制作を高橋家に帰すかどうか、或いはそれぞれ狩野派・土佐派に求めるかどうか、さらにAとBの図様の違いが依拠した故実書の違いだけで説明できるかどうか、今後調査を重ねて、十分に再考する必要があるだろう。

## 五、《湯島聖堂積奠図》

湯島聖堂本は、現在、掛幅に仕立てられているが、表装は比較的新しい。紙本淡彩で、輪郭を薄い墨でひき、淡い彩色を施し、金泥も用いている。縦五三・六cm、横一〇四・五cmと掛幅にしては大きな画面であり、紙継ぎはな

い。箱に「歴朝聖儒聖賢名切 290」とペンで記載されたラベルが貼られているが、絵とは無関係である。聖堂では元禄四年、湯島に聖堂が落成した最初の積奠を表した図との言い伝えもある(26)が、図様はあきらかに「積奠図」のCであり、この説は先行研究において否定されている(27)。

Cには、湯島聖堂のほか、徳川美術館所蔵(以後徳川本とよぶ)、神宮文庫所蔵(以後、神宮本とよぶ)の二本があり、翠川氏によると、徳川本と神宮本は同じ識語をもつ。それによると、この《大学寮積奠之図》は、元禄三年に將軍綱吉によって湯島聖堂が建てられた際に、京都に探し求めた古い《積奠図》であるという。今回、徳川美術館で調査させていただき、桐の箱に《積奠図》が二巻と、冊子本である『積奠次第』と手紙二通とが一緒に納められていることが分かった。二巻の《積奠図》は表装が同一で、絵と文書はすべて同じ寛政の頃に収集されたと見られる。この《積奠図》のうち一本は、湯島聖堂本と近いCで翠川氏が調査したもの、もう一本はA Bがひと続きに継がれており、先に紹介したように、国会図書館所蔵のA Bと図様が同一で、徳川美術館の方は画量において優れていることから、国会図書館所蔵本の原本と見られる。

徳川美術館所蔵のCの《積奠図》には、享保五年(一七二〇)、寛政元年(一七八九)の奥書がある。徳川本に附属した手紙の差出人は林大学頭で、林述斎(一七六六—一八四一)である。ここからもC系統の図が湯島聖堂と関係が深いことが裏付けられるだろう。神宮本は翠川氏の論文によると、天明六年(一七八六)に写されている。

三本のうち有職故実において諸役注記が正確なのは湯島聖堂本である。役職名は『延喜式』に合致し、服装や大学頭のかぶる「虚冠(りゅうべん)」も一致する(28)。

絵の形式は、湯島聖堂本が掛幅、ほかの二本は卷子である。内容は、徳川美術館本と神宮文庫本とが「案内図」と「堂上・廟庭図」の二場面で、湯島聖堂本だけが「堂上・廟庭図」のみとなっている。三本に共通する「堂上・廟庭図」の図様を比べると、湯島聖堂本には南門と東門が一図に納められているが、徳川美術館本と神宮文庫本では、視線は右から左へまず南門をくぐり、東門の前を横切って祭壇に向かう(29)。「堂上・廟庭図」だけと比較すると、画面形式によってモチーフの配置は異なるが、全体の情報量は同じである。三本の構図の前後関係について翠川氏は、人物につけられた役職名に注目し、徳川美術館本と神宮文庫本にある誤記は、絵を横長の卷子に改める際、本来と異なる人物に付随させたために生じたものと見られることを手掛かりに、湯島聖堂本が最も古い形式とみている(30)。

湯島聖堂本と他の二本は、学生群の一人一人の仕草が一致するなど部分的には同じ図様と言えるのだが(挿図6)、湯島聖堂本のみ唐風の衣装であることと、釈奠の最大の行事とも言える孔子拝廟の場面において、孔子像が見えている点で記録画として決定的な違いをもつ。この点をどのように考えるかが、C系統の図の来歴を考えるための手掛かりになるだろう。三本は同系列というより、共通の粉本に基づく二つの試作品である可能性もある。また徳川美術館本と神宮本に見られる「案内図」ほどの故実書にも当てはまらず、内容の特定が出来ない。以上の問題点から、この《釈奠図》は、『延喜式』のような故実書を参考にしただけでなく、依拠した絵面粉本が一点ならず存在したことが予想される。三本の図様の比較考察は今後の課題として、今回は最後に湯島聖堂本だけを絵としてながめ、留意点をのべたい。

まず構図にいささか無理が感じられる。例えば東門の外にいる兵士の視線は何も描かれていない左手を見ている(挿図3)。また右端の学生や、南門の

外を守る武士の一人が不自然に切れている(挿図4)。全体的に構図は安定感を欠き、右側は手狭な印象がある。さらに朱の衣を着た官人たちと、学生や兵士や楽士とでは、頭部の大きさやプロポーションが微妙に異なり、右上にいる学生の顔の大きさは、その左に並ぶ三人の謁者より明らかに大きい。異なる図様を組み合わせて、群像を作り上げた試行錯誤のあとと見るべきなのだろうか。

人物表現については、大学頭は老齢で恭しく、学生は若く闊達そうに描かれ、表情や身振りに細かい気配りが見られる。住吉派の残した《年中行事絵巻》ほど豊かに人々の感情を捕えているわけではないが、役職の付いた画中の人物は、お互いに顔を向け合って並んでおり、見入れば会話が聞こえてきそうな、温かみの感じられる情景となっている。さらに印象的なのは、参列者たちが喜ばしい表情で儀式に臨んでいる点にある。このようなことから、他の系列の「釈奠図」のような肅々とした記録画とは、表現内容が根本的に異なっていると思われる。

説話絵巻を思わせる、中世やまと絵の手法は、人物以外にも随所に指摘できる。画面の隅を切るように、左下から右上にのびている門の描き方、門と祭壇の線が逆遠近法になっていること、楽士たちの描法(挿図5)、さらに中国風の建物の市松模様床や反った石段、鮮やかな色彩は、やまと絵における中国の表現として一三世紀には確立しており、『華嚴祖師絵伝』(31)(挿図14)などが近い例として挙げられる。

モチーフのうち、特に注目されるのは、式の中心的存在である孔子十哲である(挿図2)。金泥で輪郭をとり彩色を施した像が、簾の目の一本一本を透かして見えているが、簾越しに生き姿であるかのような先師十哲の姿は、「聖賢図」などの粉本を重んじる肖像画の伝統とはまったく異質である。孔子の



冠の形、十哲が無帽であること、彼らが微笑をたたえていることなど、いずれも類例を見ない。そもそも「積奠図」のAやBでは、孔子十哲に画像を用いているし、徳川美術館本と神宮文庫本では、同じ場面でも簾を垂らし、孔子十哲の姿を描いていないのである。この特別な図様には、中国から伝来した粉本、それも肖像画ではなく、「聖蹟図」のような粉本が想定されるだろう。さらにこのような粉本を使用するならば、本来この図が独立した記録画としての「積奠図」ではなく、寺社縁起絵巻のような絵巻の一場面として描かれた可能性も考えられる。「積奠図」は儒教美術の一分野ではあるが、湯島聖堂本を見る限り、年中行事絵巻のような、他のやまと絵との関わりを視野に入れないならぬ。

なお湯島聖堂本が、元禄四年の積奠を描いたという説は、元禄四年以前の古い図であるからあたらぬにしても、大成殿が朱漆の唐風の建物だったこと(32)、孔子像が小さいながら木彫彩色の像だったこと(33)が実際の儀式と一致し、この図が、元禄四年の積奠の資料となった可能性までは否定することもできない。今後、改めて考えてみたい問題である。

近世に求められた「積奠図」は、流布状況から絵の内容より、儒教関係資料としてこれを所持することに意義があったと見られる。「積奠図」の成立と流布には、江戸幕府の文治政策を背景とした湯島聖堂建立をはじめ、京都において天皇周辺に興った朝儀復興への関心や、各地方における儒学の興隆などが関係している。「積奠図」の歴史には、江戸における儒学者の学問に対する熱意や、既に古典だった古代中世への関心などが垣間見えてくる。このような「積奠図」の研究には、美術史だけでなく、歴史学、儒教、教育史学など、各分野の研究が必要とされている。

## 注

- (1) 『国史大事典』積奠の項。
- (2) 積奠について主に次の論文を参考にした。坂本太郎博士古稀記念会編『続日本古代史論集(下巻)』吉川弘文館 一九七二年 三五六―四六八頁。
- 翠川文字「積奠(一)―前期積奠年表」『川村短期大学研究紀要 第十号』一九九〇年三月 二五八―二七三頁。
- 同「積奠(二)―孔子像」『川村短期大学研究紀要 第十一号』一九九一年三月 二二六―二〇九頁。
- 同「積奠(四)―太政官庁積奠復元(1)」『川村短期大学研究紀要 第十三号』一九九三年三月 一四二―一二五頁。
- 同「積奠(五)―太政官庁積奠復元(2)」『川村短期大学研究紀要 第十四号』一九九四年三月 二三八―二二四頁。
- 同「積奠(六)―太政官庁積奠復元(3)」『川村短期大学研究紀要 第十七号』一九九七年三月 二二二―一九九頁。
- 同「積奠(七)―太政官庁積奠復元(4)」『川村短期大学研究紀要 第十八号』一九九八年三月 一九六―一八三頁。
- (3) 翠川文字「三条西実隆の積奠詩会―三条西所蔵積奠詩懷紙の紹介をかえて」『文学・語学 第五七号』一九七〇年九月 九七―一〇七頁。
- 森江次「東洋に於ける積奠史―中国・朝鮮・日本の孔子祭」一九九九年あさの印刷。
- (4) 「積奠図 書物品類云 享保十四年十一月廿五日 紀宗直有 奥書一本 狩野永納写本、又松岡宗愨所依伊賀本、元幹曰、大図小図の異あり、江家次第等によりて製する所、素より年中行事のものにあらず」『考古画譜』黒川真頼全集 国書刊行会 明治四三年三月 二五一頁 下段六行目―一〇行目。
- (5) 図版は「湯島聖堂と江戸時代」一九九〇年八月 斯文会に掲載されている。
- (6) 翠川文字「積奠(三)―積奠図」『川村短期大学研究紀要 第十二号』一九九二年三月 二二二―一七六頁。
- (7) 「積奠図」―三本の名称と所蔵先は次のとおり。前掲注6には各資料の調査報告が掲載されており、形式や識語など詳細なデータを知らることができる。ABCの分類と配列は、注6をそのまま引用している。

A 1 積奠之図 西尾市立岩瀬文庫  
A 2 積奠図 穂久邇文庫

- A 3 本朝釈奠之図 天理図書館  
 A 4 釈奠図 実践女子大学  
 A 5 国朝廟堂行事古図 國學院大学  
 A 6 釈奠図 宮内庁書陵部  
 A 7 釈奠図 宮内庁書陵部  
 B 1 釈奠図 国会図書館  
 B 2 釈奠図 蓬左文庫  
 B 3 釈奠図 穂久邇文庫  
 C 1 釈奠之古図 徳川美術館  
 C 2 釈奠之古図 神宮文庫  
 C 3 歴朝聖賢名儒名物 湯島聖堂(湯島聖堂のカタログには湯島聖堂「釈奠図」と記載されている)
- (8) 前掲論文注6 二〇八頁下段一八一—一九行目。  
 (9) 翠川氏は識語に高橋宗恒への言及がないため、東涯が借りたのは宗恒本人ではなく親宗など周辺の人物であると推測している。  
 前掲論文注6 二〇七頁上段一六一—一九行目。  
 (10) 東涯本と宗恒本のちがいは、東涯本の第三図には、宗恒本には見られない、文台を運ぶ大学寮の官人の姿が描きこまれていることなど。  
 (11) 前掲論文注6 では宮内庁所蔵の一本が紹介されている。  
 (12) 「釈奠供物図 一卷 奥書云、右弘安年中釈奠供物一卷、御厨子缺左馬権助紀宗長朝臣自筆也 以下筆者略」『考古画譜』黒川真積全集 国書刊行会 明治四三年三月一—二五頁 下段 一三一—一七行目。  
 (13) 所蔵先は宮内庁や東大図書館など。  
 (14) 松尾芳樹「釈奠図と尚歯会図」『土佐派絵画資料目録(五) 絵巻』京都市立芸術大学芸術資料館 一九九五年 七二—七八頁。  
 弘安一〇年(一二八七)に亀山上皇が仙洞の評定所を孔子廟としておこなった釈奠で、図像は大学寮の孔子十哲の図を写したもの。松尾氏は、この図も古記録に基づいて釈奠のイメージを後世に残した「擬古的解説図の域を出ない」と指摘している。  
 (15) このうち実際に閲覧できたのは、国会図書館所蔵のもので、展覧会では足利学校本、そのほかは掲載図版によって確認した。  
 (16) 図版「足利学校展—日本最古の学校 学びの心とその流れ」足利学校 二〇〇四年。この展覧会は二〇〇四年九月一八日から二〇〇四年一〇月二四日まで足利美術館で開催された。  
 (17) 菅野和郎「延喜天曆間「釈奠図」二『玉川大学教育博物館誌』一九九七年六月。  
 (18) 『京都産業大学日本文化研究所報 あふひ 第六號』京都産業大学日本文化研究

- 二〇〇〇年九月。  
 (19) 前掲論文注14。  
 (20) この箇所全文は「按此俎豆之可見式敷礼記曲禮上注云古者序地而俎豆在其前云々 此案図者永納図之出処可考改之牲左右兩足誤也見式可改之」このように宗直は永納図の誤りを指摘し、延喜式を見て訂正すべきであると書いている。  
 (21) 狩野探幽の探幽縮図などに代表されるように近世の絵師たちは大量の粉本を残している。土佐派の下絵と言う場合は粉本のこと、後世に図様を伝えるために制作された。現代用語の下絵、つまり作品制作のための下書きとは意味が異なる。  
 (22) 下絵には「著廟門座」の語が記載されておらず、図様も「拝廟」と合わせて一場面になっているので前掲論文注14の解説のように四場面とする見方もあるが、前掲注6の翠川氏の調査報告と統一するためにあえて二場面とし、五場面とした。  
 (23) 前掲論文注14 七七頁上段三—四行目。  
 (24) 筆者が図様を確認できたのは、湯島聖堂本のほかには足利学校所蔵の「釈奠之図」、国会図書館所蔵のA B合巻本、と翠川氏の分類したBである。また土佐家に伝わる粉本は、図版によってすべての図様が確認できる。これ以外は、翠川氏のご厚意によって写真で確認させていただいた。本来、すべて確認したうえで書くべきであるが、例えばCの神宮文庫は平成十七年三月まで閉館されていたなど、この報告書に間に合わせることはできないため、今回は写真で確認できる範囲内で書いた。  
 (25) 前掲論文注14 七五頁下段一九—二四行目。  
 (26) 現在湯島聖堂に置かれている絵はがきにも、「將軍参廟の釈奠の模様を描いたものと思われる」と解説されている。  
 (27) 前掲論文注6 二〇八頁下段一三一—一九行目。  
 (28) 前掲論文注6において詳細に考証されている。  
 (29) 神宮文庫本は翠川先生に見せていただいた写真に依拠する。  
 (30) 前掲論文注6 二〇四頁下段六一—三行目。大学頭につけるはずの「初献」の注記が、徳川美術館本と神宮文庫本では絵巻のかなり手前にある、東門前に座る人物につけられている。翠川氏は、この誤りを、原図を横に長くひきのばした際に、注記が誤って別の人物に付随したため生じたと指摘する。  
 (31) 一三世紀の絵巻で高山寺所蔵 国宝。  
 (32) 『聖堂略志』孔子祭典会 明治四一年四月 一四頁一行目—一〇行目によると、「正殿は—中略—殿の外部、斗拱、肘木、蛙股等は雲形彫刻を施し柱梁等は皆朱漆にして東及び南に圭頭牖を設け、—東西の廊は—中略—柱楹牆壁は朱漆にて牖の格子は彩絵し塗るに青緑を以てせり」門より殿に至る間中央石を鑿み、他はすべて黒き細石を布き」という様子だった。

(31) 伊藤たまき 「旧湯島聖堂大成殿内の孔子像に関する一考察」(本書に収録)  
を参照。



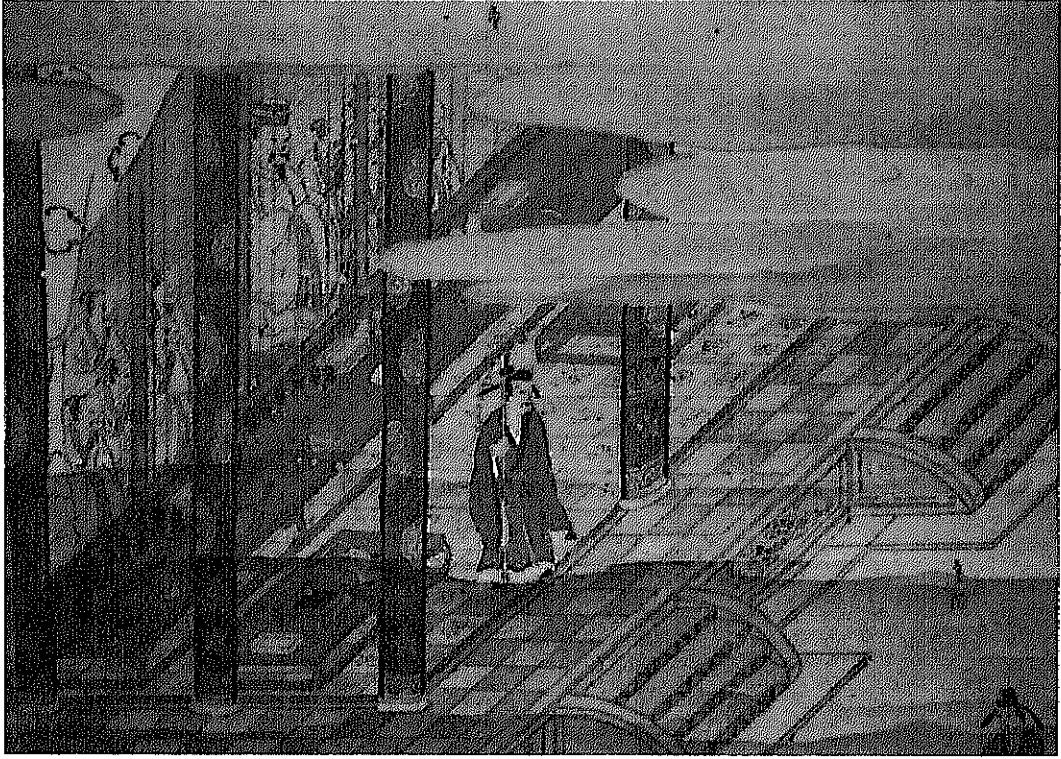


插图2 《湯島聖堂积奠图》部分 孔子十哲

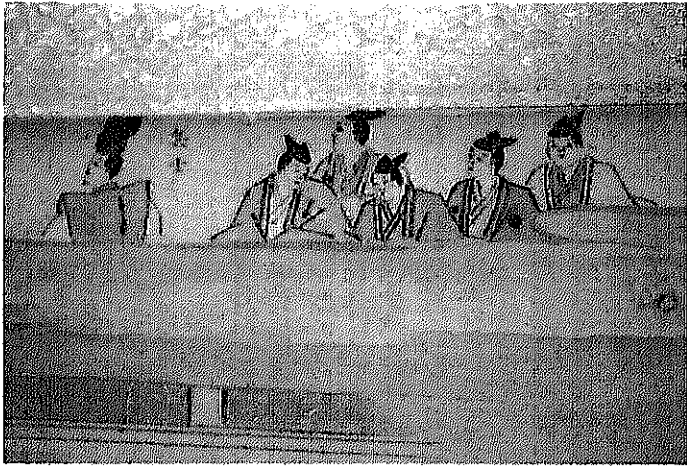


插图3 《湯島聖堂积奠图》部分 東門



插图4 《湯島聖堂积奠图》部分 南門



插图 5 《湯島聖堂积奠图》部分

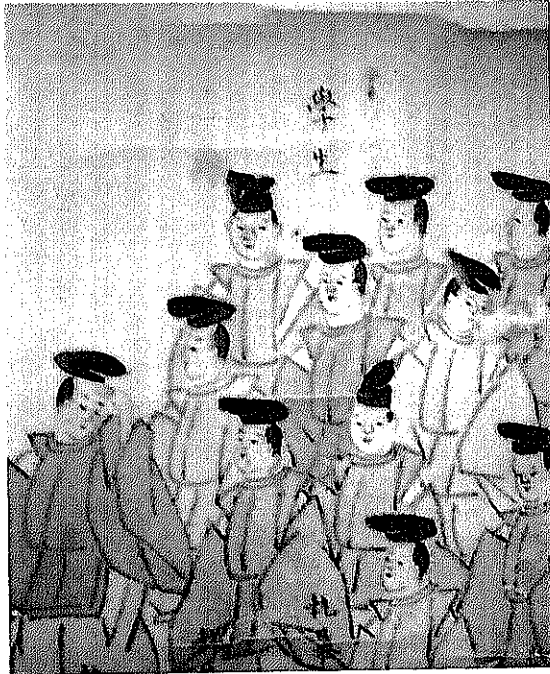
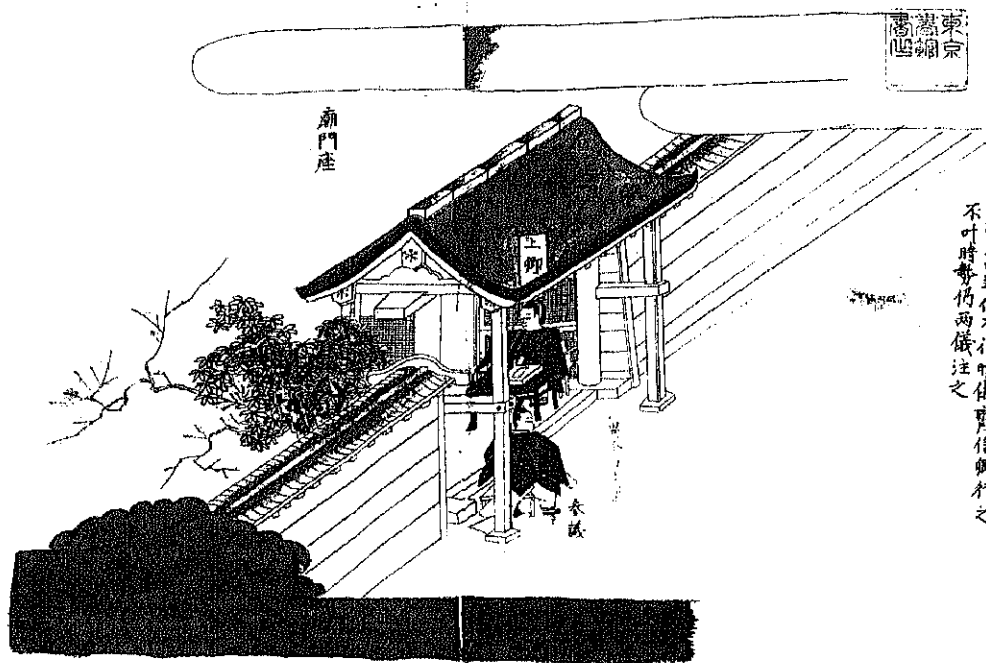


插图 6 《湯島聖堂积奠图》部分

挿図7

《釈奠図》

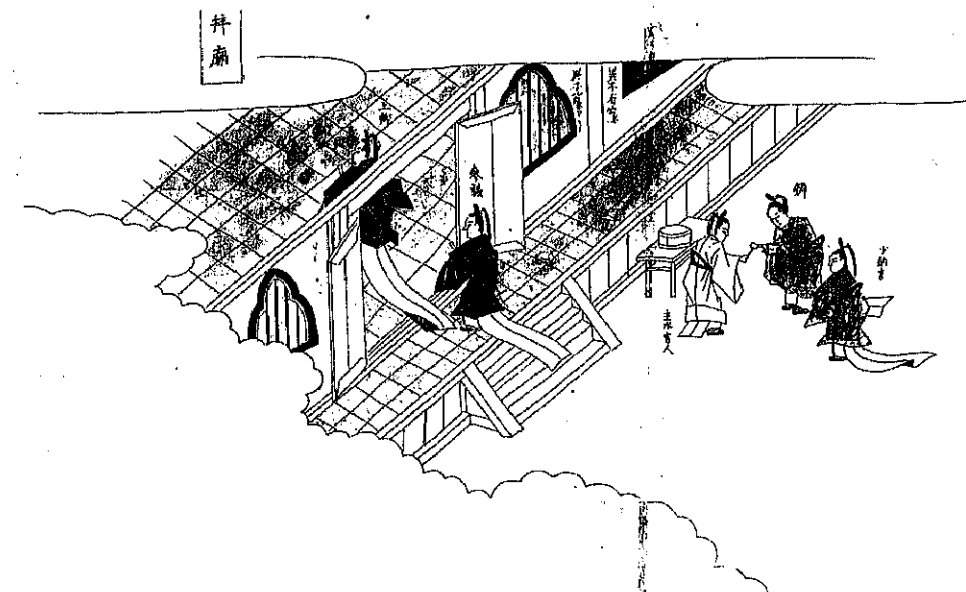
A系統一廟門座 国会図書館



挿図8

《釈奠図》

A系統三拜廟(堂下) 国会図書館



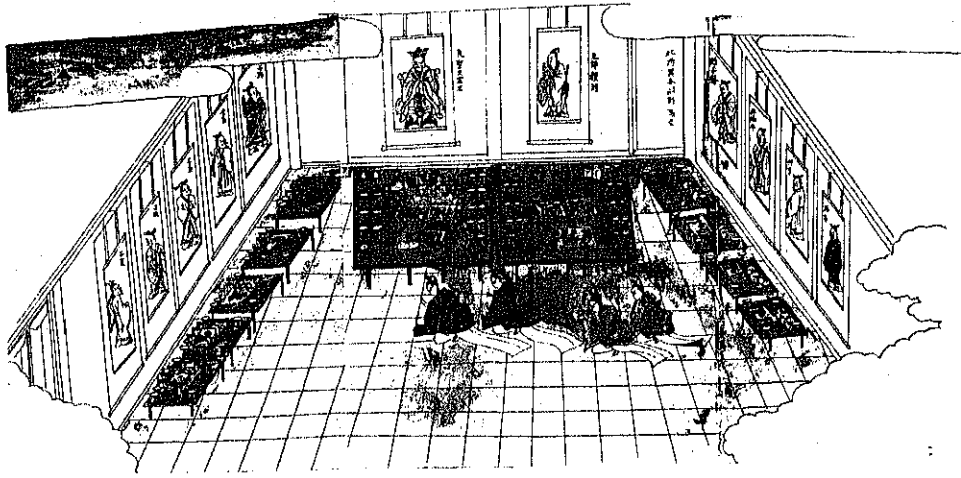


插图9 《积奠图》 A系统四柱厅（堂上） 国会図書館

此图是正元元年（1000）所绘，其时日本佛教建筑已受唐风影响，故其形式与唐制相似。此图所示之四柱厅，其形式与唐制相似，其形式与唐制相似。

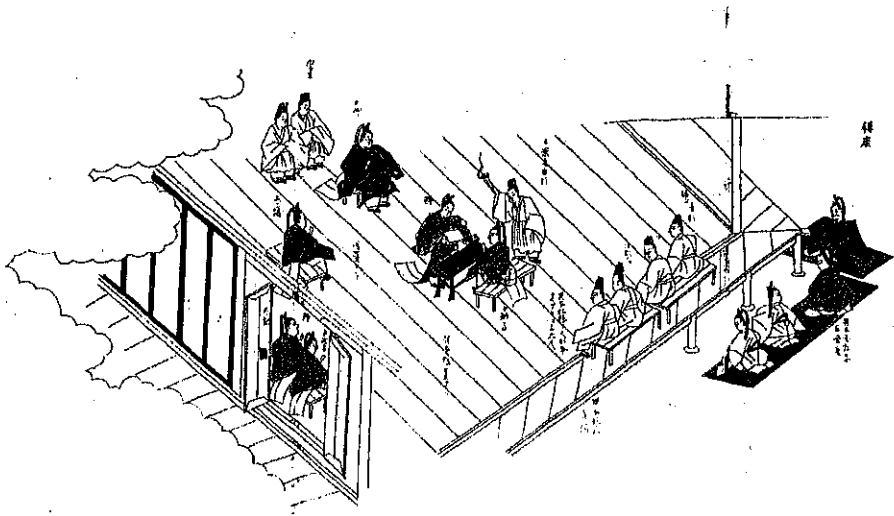
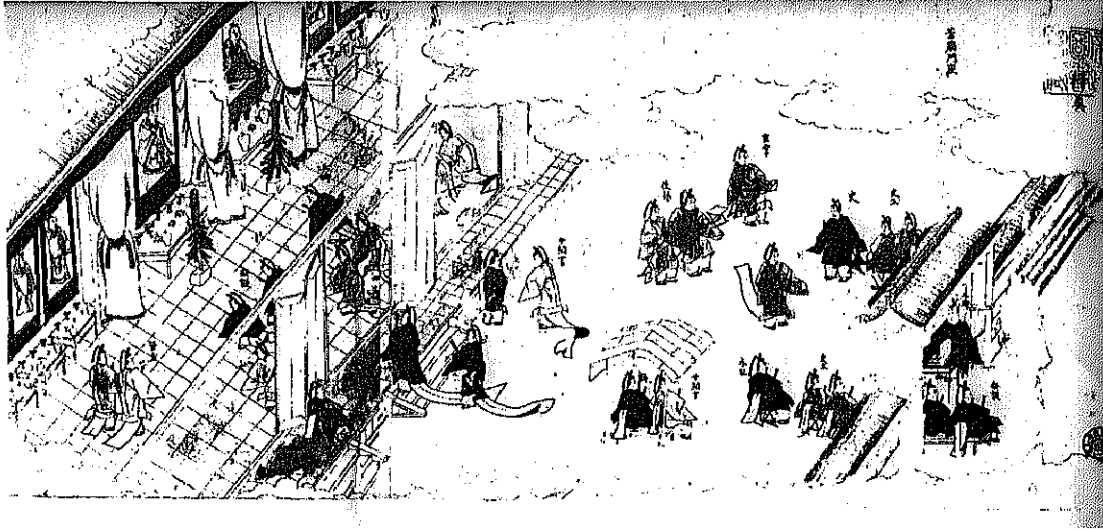


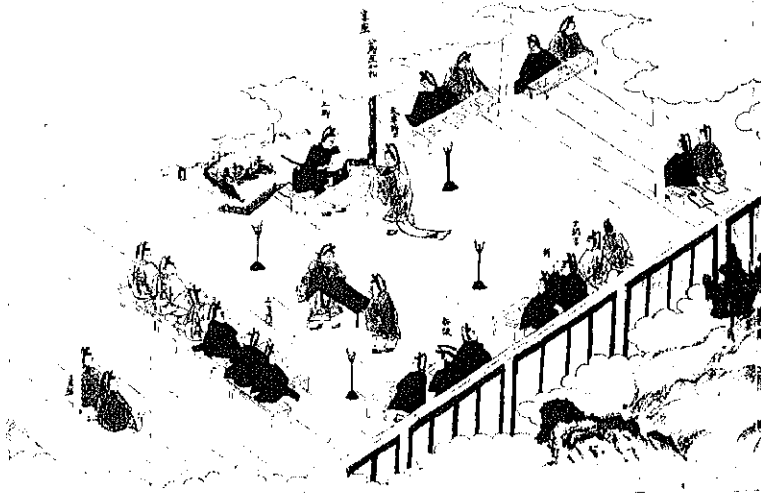
插图10 《积奠图》 A系统十稳座 国会図書館

此图是正元元年（1000）所绘，其时日本佛教建筑已受唐风影响，故其形式与唐制相似。此图所示之十稳座，其形式与唐制相似，其形式与唐制相似。



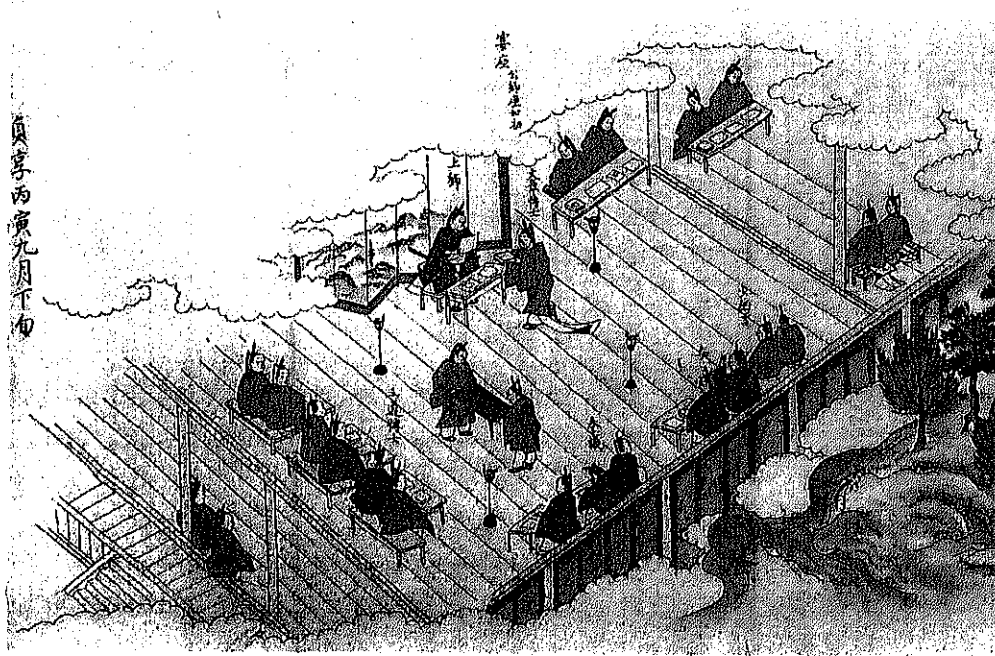


挿図 11 《釈奠図》 B系統一廟門座・幄座と二拝廟 国会図書館



挿図 12 《釈奠図》 B系統五宴座

挿図13 《秋奠図》 B系統 京都産業大学図書館



挿図14 《華嚴経祖師絵伝》 部分 建物 描き起こし

